

英語で教える英語の授業が学習者の教授言語の好みに与える影響

Effects of Teaching English in English on Learners' Preferences for Instructional Languages

次世代教育学部教育経営学科

岩中 貴裕

IWANAKA, Takahiro

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：新しい学習指導要領，教授言語，英語を英語で，大学英語教育

Abstract : The purpose of this study is to clarify how teaching English in English would influence learners' preferences for instructional languages. Forty-three undergraduates were employed as the participants. They took an English course taught by the author, which consisted of 15 lessons. To clarify how their preferences for instructional languages changed while taking the course, the same questionnaire was given at the beginning and the end of the course. The results are: 1) learners would like their teachers to use both Japanese and English judiciously as a medium of instruction and 2) learners with high English proficiency would like their teachers to use English more in class. It is then discussed that learners with high English proficiency are likely to prefer cognitively demanding tasks and that just using English for teaching English is not good enough to satisfy their needs. It is finally argued that university English courses need to incorporate activities which would encourage learners to develop their English literacy.

I. はじめに

外国語指導の際に使用される言語は，教授言語 (Medium of Instruction: MOI) と呼ばれる。日本における英語の授業は，教師が学習者の母語（以下，L1）である日本語を用いて教えるという指導法が主流であった。しかしこの状況が現在，変わりつつある。

新しい学習指導要領の施行に伴い，高等学校では平成25年度より英語の授業を英語で行うことが基本となった。つまりMOIを英語とすることになったのである。これまで学習指導要領は，教えるべき内容についての規定はしてきたが，教え方を明確に示すことはなかった。今回の学習指導要領は，教え方まで踏み込んだ提言を行っている。そして今後，この傾向はさらに強まっていくと考えられる（西川，2015）。

高等学校における方針の変更は，大学英語教育にも影響を与えると思われる。大学の英語教育も時代の変化に対応していくことが求められる。筆者らは，新しい学習指導要領が大学英語教育に与える影響を明らかにするために，平成26年度よりTEE Project

(Teaching English in English) を開始した。このプロジェクトは科学研究費の補助を受けて実施している。プロジェクトの概要を表1に示す。

表1 TEE Project

研究課題	「英語を英語で」教える高等学校新指導要領が大学英語教育に与える影響（課題番号：26284080）
種目	基盤研究B
研究代表者	岩井千秋（広島市立大学）
研究分担者	岩中貴裕（環太平洋大学） ウィリー，イアン（香川大学） 高垣俊之（尾道市立大学） 小西廣司（松山大学） カワモト，ジュリア（松山大学）
研究協力者	カーソン，エレノア（広島市立大学非常勤講師）
研究期間	平成26-30年度（平成30年度は総括）

TEE Projectは大学生英語学習者，及び大学の英語授業担当教員を対象に，経年調査を行う。調査が特定の層の英語学習者を対象としたものになってしまうのを避けるため，4つの大学で調査を実施する。その上

で、旧学習指導要領で英語を学んだ学習者グループ（H26・27年度入学生）と新学習指導要領で英語を学んだ学習者グループ（H28・29年度入学生）を比較することを主目的とする¹。

筆者は平成26年度に英語をMOIとして授業実践を行った。本稿はまずその実践研究の内容を説明し、その実践研究から明らかになったことを報告する。次にその結果に基づいて、大学において提供される英語の授業がどうあるべきかについて考察を加える。

II. 研究

1. 研究上の問い

本実践研究は、以下の2つの研究上の問いに答えることを目的とする。

- (1) 教師の授業における英語使用は学習者の教授言語に対する好みにどのように影響を与えるのか（以下、RQ1）。
- (2) 学習者の英語力は教授言語に対する好みにどのように影響を与えるのか（以下、RQ2）。

2. 調査参加者

調査参加者は英語を専攻としない学部学生43名である。西日本にある大学の、自然科学系の学部に所属する1年生である。調査開始時に自分の現在の英語力を自己申告させた。その結果を表2に示す。

表2 調査参加者の英語力

レベル	人数
英検4級レベル	3
英検3級レベル	22
英検準2級レベル	15
英検2級レベル以上	3
合計	43

調査参加者は受講終了時にTOEIC-IPを受験した。その平均値は、リスニング232.16 ($SD = 55.02$)、リーディング178.30 ($SD = 53.10$)、合計410.45 ($SD = 94.04$)であった。合計数は43名となっているが、これは2クラス分の受講生の合計である。両クラスとも筆者が授業を担当し、同シラバス、同テキストで授業を行った。

3. 調査参加者が受講した授業

調査参加者が受講した授業は、4技能をバランス良く育成することを目的とした授業であり、週1回開講された。毎回の授業の長さは90分であった。

授業内には意味のやり取りを目的とした言語活動を取り入れ、調査参加者がペア、または小グループでのコミュニケーション活動に従事する時間を確保した。授業は原則として英語で行った。調査参加者が受講した英語の授業は、調査を実施したこの授業だけである。

授業を開始してから約1カ月経った時点で調査参加者に、自分が受講している授業が以下の6つのどれに該当するのかわを選ばせた。

- (A) 日本語が母語の先生で、授業はほぼすべて英語で行われている。
- (B) 日本語が母語の先生で、授業では日本語も少し交えて行われている。
- (C) 日本語が母語の先生で、授業はほとんど日本語で行われている。
- (D) 日本語が母語でない先生で、授業はすべて英語で行われている。
- (E) 日本語が母語でない先生で、授業は少し日本語を交えて行われている。
- (F) 日本語が母語でない先生で、授業はほとんど日本語で行われている。

調査参加者の回答結果は図1のようになった。同じ授業を受けていても、回答にバラつきが生じているのが確認できる。

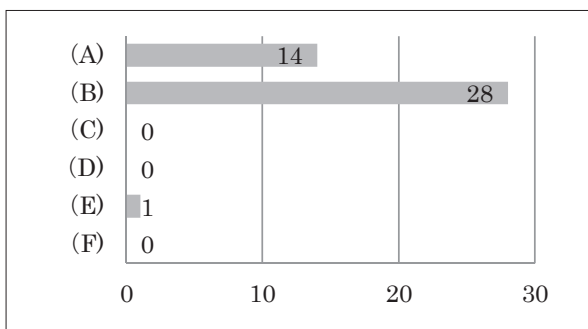


図1 調査参加者が受講した授業

(E) を選択した調査参加者が1名いたが、これは(B) との勘違いであったと考えられる。

1 調査内容の詳細については岩中他 (2015) を参照。

4. データ収集

データ収集のために Student Preferences for Instructional Language (以下, SPIL) を用いた。SPILは学習者のMOIに対する好みや態度を測定するために開発されたアンケートであり、その信頼性が既に確認されている²。

5月(以下, 第一時点)と7月(以下, 第二時点)にアンケートを実施した。2つの時点で同じアンケートを実施することによって、調査参加者のMOIに対する態度がどのように変化するかを明らかにすることを試みた。

5. 結果

前述のように調査参加者は、第一時点と第二時点で SPILに回答した。本稿はSPILを構成する質問項目のうちの3つの質問項目を紹介し、その回答結果を報告する。

5.1 RQ1

教師の授業における英語使用は学習者の教授言語に対する好みにどのように影響を与えるのであろうか。

① あなたは英語の先生に授業中にどの程度、日本語を用いて説明してもらいたいですか。およその割合を以下から選んでください。

- (A) 0% (B) 20% (C) 40%
(D) 60% (E) 80% (F) 100%

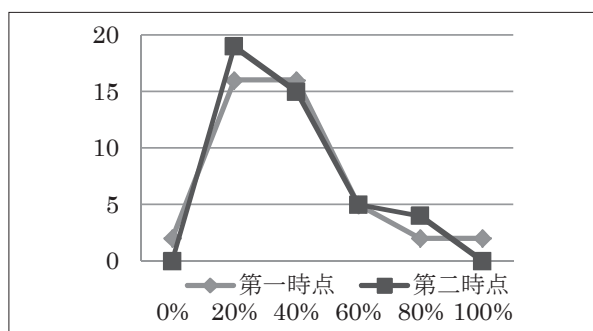


図2 日本語の使用割合に対する要望

第二時点では、0%または100%を選択した調査参加者がゼロになっている。第一時点で、日本語の使用は0%で良いと判断した2名の調査参加者は、第二時点ではいずれも20%を選択していた。

2 SPILの詳細については Carson (2015) を参照。

第一時点で100%を選択した調査参加者が2名いたが第二時点ではゼロになっている。第二時点では1人が80%を選択し、もう1人が40%を選択していた。

② あなたはすべてのことが英語で行われる英語の授業についてどう思いますか。

- (A) とても望ましい (B) 望ましい
(C) どちらとも言えない
(D) いや (E) 絶対いや

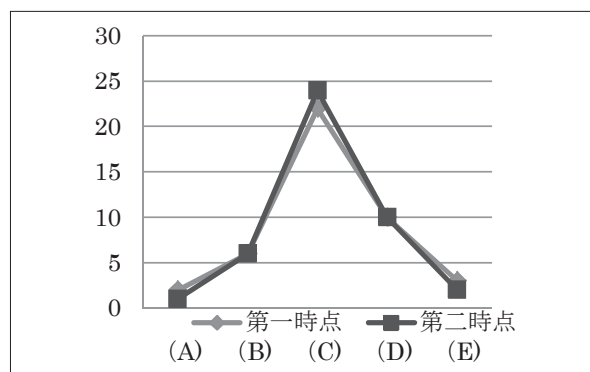


図3 MOIとして英語のみを使用することに対する反応

第一時点と第二時点で大きな変化は見られない。第一時点では(C)を選んだ調査参加者が22名いたが、第二時点では24名になっていた。また(A)と(E)を選んだ調査参加者の数が第二時点では減少していた。

③ 主に英語だけで教えられる英語の授業は、あなたの学習意欲を高めると思いませんか。

- (A) とてもそう思う (B) そう思う
(C) どちらとも言えない
(D) そう思わない
(E) まったくそう思わない

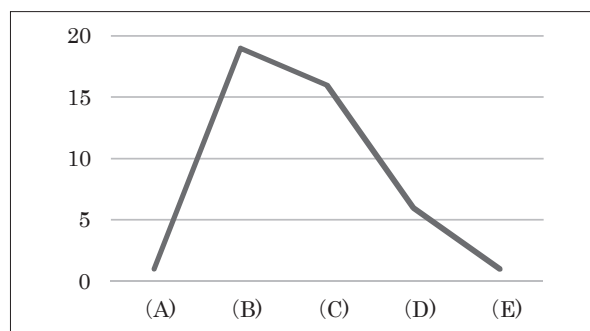


図4 MOIとしての英語使用が学習意欲に与える影響

この質問には、第二時点でのみ回答した。(B)を選んだ調査参加者の数が19人で最も多かった。次いで(C)の16人であった。

5.2 RQ2

学習者の英語力は教授言語に対する好みによりに影響を与えるのであろうか。調査参加者の中に英検4級レベルの学生が3名、英検2級またはそれ以上のレベルの学生が3名いた。彼等が3つの問いに対してどのように回答したのかを確認していきたい。

① あなたは英語の先生に授業中にどの程度、日本語を用いて説明してもらいたいですか。およその割合を以下から選んでください。

- (A) 0% (B) 20% (C) 40%
(D) 60% (E) 80% (F) 100%

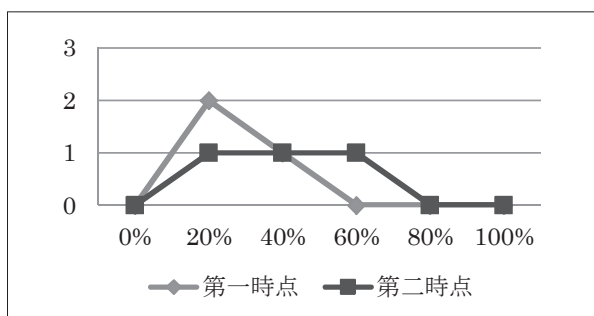


図5 日本語の使用割合に対する要望 (4級レベル)

第一時点では20%が2名、40%が1名であったが、第二時点では20%が1名、40%が1名、そして60%が1名という結果になった。

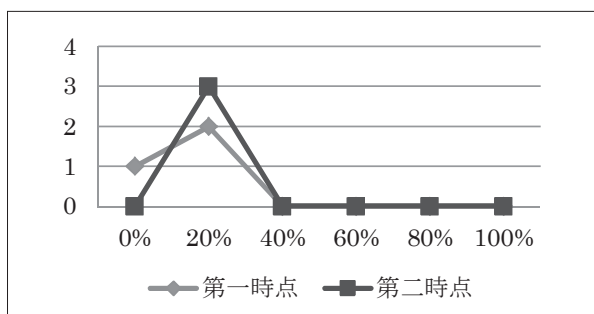


図6 日本語の使用割合に対する要望 (2級レベル以上)

第一時点では1名が0%、2名が20%を選んでしたが、第二時点では全員が20%を選択していた。2級レベル以上の調査参加者と比較すると、4級レベルの調

査参加者方が授業においてより高い割合での日本語使用を求めていることが分かる。

② あなたはすべてのことが英語で行われる英語の授業についてどう思いますか。

- (A) とても望ましい (B) 望ましい
(C) どちらとも言えない
(D) いや (E) 絶対いや

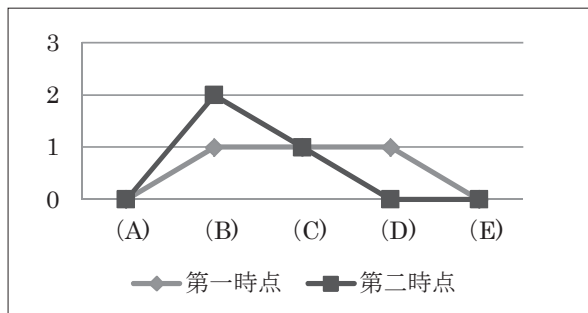


図7 MOIとして英語のみを使用することに対する反応 (4級レベル)

第一時点ではそれぞれ1名ずつが(B)、(C)、(D)を選択していたが、第二時点では2名が(B)を、そして1名が(C)を選択していた。

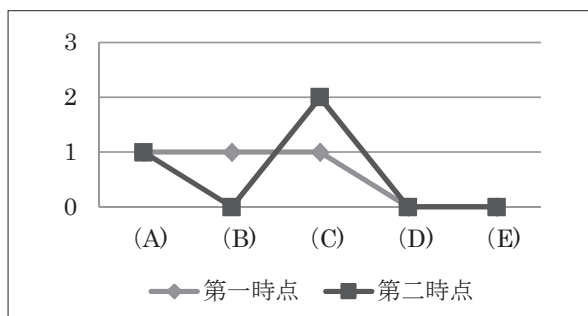


図8 MOIとして英語のみを使用することに対する反応 (2級レベル以上)

第一時点ではそれぞれ1名ずつが(A)、(B)、(C)を選択しているが、第二時点では1名が(A)を、そして2名が(C)を選択している。

英語力の高い学習者は授業においてより多くの英語使用を求める傾向があるが、すべてのことが英語で行われる授業に対して、必ずしも望ましく思っていないことが分かる。

③ 主に英語だけで教えらる英語の授業は、あなたの学習意欲を高めると思えますか。

- (A) とてもそう思う
- (B) そう思う
- (C) どちらとも言えない
- (D) そう思わない
- (E) まったくそう思わない

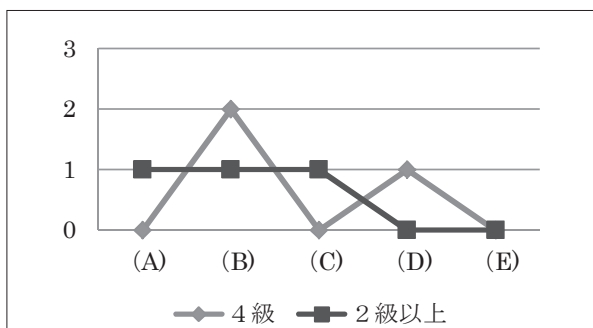


図9 MOIとしての英語使用が学習意欲に与える影響

2級レベル以上の調査参加者については、それぞれ1名ずつが、(A)、(B)、(C)を選択している。一方、4級レベルの調査参加者については2名が(B)、そして1名が(D)を選択している。

調査参加者が限られているため、一般化することは出来ないが、調査から得られた結果を表3に示す。

表3 調査結果

RQ	結果
1	主として英語で英語を教える授業を実践した結果、第二時点では日本語の使用割合0%、または100%を希望する調査参加者はゼロになった。
2	英語力の高い調査参加者の方が、授業における日本語の使用を求める割合が低くなる。しかし、英語で教えられる英語の授業を高く評価しているとは結論できない。

英語の授業においてどのくらいの割合で日本語または英語を使用すべきかについては、様々な意見があるであろう。調査結果から判断すれば、授業のすべてを日本語または英語のみで行うことを希望している学習者はいない。どの程度の割合が望ましいのかについては幅があるが、学習者は英語と日本語をバランス良く組み合わせた授業を望んでいる。参考のために挙げておくと、Macaro (2011) は目標言語の使用を80%程度とするのが望ましいとしている。

英語力の高い学習者は、英語力の低い学習者と比較すると、授業において日本語でのサポートを必要とする程度が低くなる。しかし、英語力の高い学習者は、英語の授業に知的な活動を求める傾向がある。授業が英語で行われていても、そこで習得できるスキルや知識が彼らの知的水準に合致していないと、授業に対す

る満足度が低くなる。

2級レベル以上の調査参加者3名のうち2名と、調査終了時に面談を行った。そこから、授業を英語で行うだけでは解決できない別の問題があることが明らかになった。

6. 考察

6.1 英語で教える英語の授業に対する誤解

授業を英語で行うということだけが焦点を当てられているが、それだけで学習者の中間言語の効率的な成長がもたらされるわけではない。

例えば、授業のすべてを日本語で行っている人が、授業の構成はそのまま授業をすべて英語で行ったらどうなるのであろうか。以下のように、文法説明も英語で行うのであろうか。

We use the present progressive to talk about “actions and situations happening at the moment of speaking. We don’t use the present progressive to talk about “habits.” For “habits,” we use the simple present. (卯城, 2014, p. 25)

授業を英語でというのは、上記のような文法説明を英語ですということではない。文法については場面で導入し、活動を通して理解と定着を図るという指導が望ましい。その方法を取れば、文法説明を上記のように英語で行う必要はないはずである。

授業を英語で行うことについて議論がなされる際、文法説明をどうするのかという声が必要が出るが、これは自分が行っている授業の内容や構成について再検討することなく、MOIのみを日本語から英語に変更しようとする発想から出てきているのである。授業を英語で行うということはMOIのみを英語にすることではなく、授業そのものを根本的に再検討することを意味している。

英語の授業を英語で行う際に陥ってしまいやすいものひとつが、教科書または配布資料の答え合わせを英語で行うという授業である。教科書の流れに沿って授業を行い、指示や解答の確認を英語で行うと、表面的には授業の大半を英語で行うことが可能である。教科書に沿って授業を展開することができるため、教師の負担も少なく学生にとっても分かりやすい授業である。しかし、教師主導の授業であり授業内のインタラクションは非常に限定的になってしまう。このような授業では、英語をコミュニケーションのために使用する

る能力を育むことはできないであろう。

6.2 コミュニケーション能力育成を促進する英語の授業

第二言語 (L2) 習得を効率の良いものにするために、必要な条件は何であろうか。第二言語学習環境が母語習得環境と似ている時に、L2をコミュニケーションのツールとして使用する能力が効率良く習得されるとSLA研究者は考えている (Krashen, 1982; Long, 1990; Swain, 2000)。

つまり授業では、1) 形式ではなく意味に焦点が当てられている、2) 理解可能なインプットに大量に触れることができる、3) 不安の少ない場面で目標言語を意味のやり取りのために使用する機会がある、という3つの条件を満たす必要がある。

筆者は、2010年度から英語の授業を英語で行うという試みを実践している。その際に以下に挙げる4つを授業の方針としている。

- ① 学習者が意味のやり取りのために英語を使用する機会がある。
- ② 授業内ではペアまたは小グループでの活動を重視する。
- ③ 学習者が不安の少ない場面で目標言語を使用する機会がある。
- ④ 文法事項、語彙などはリスト化して事前に配布し、受講生の授業前の学習を促す。

上記の方針に従いながら、Presentation, Comprehension, Practice, Production (以下、PCPP) の手順で授業の大半を英語で実施するという実践を行っている。この手順で行われる授業は、学習者の認知プロセスに効果的に働きかけると考えられている (村野井, 2006)。

この授業方法で、受講生の英語力の向上と英語学習に対する動機づけの向上がもたらされることが明らかになっている (岩中, 2011)。英語に対して強い苦手意識を持っている学習者にとっても有効な授業形態であることが、これまでに確認できている³。しかし、英語力の高い学習者からの評価は分かれている。その理由と解決の方法について次節で検討する。

3 詳細は岩中 (2014) を参照。

6.3 大学で望ましい英語の授業

授業の大半を英語で行おうとすると、扱える言語材料が認知的負荷の低いものになってしまいがちである。筆者のこれまでの経験では、高い英語力を備えた学習者は、そのような授業に対して否定的な反応を示す傾向がある。低次思考スキル (Lower-order Thinking Skills) のみで構成されている英語の授業に対して物足りなさを感じているのであろう。

図10に示すように、思考スキルは高次思考スキル (Higher-order Thinking Skills) と低次思考スキル (Lower-order Thinking Skills) に二分できる (Anderson et.al, 2001)。

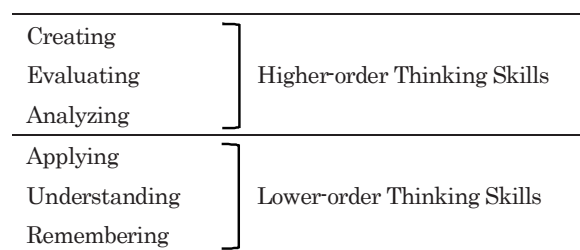


図10 思考のレベル

先述のPCPPの手順で英語の授業を行う場合、最後のProductionの段階で受講生の知的欲求を充足させるような活動を定期的に取り入れる必要がある。例えば、習った文型や語彙を用いて自分のことについて述べるという活動は図10のApplyingのレベルの活動であり、低次思考スキルのレベルである。これでは英語の授業に知的な活動を求めている学習者の要望に応えることができない。大学における英語の授業は、学習者を高次思考スキルに従事させるような活動を取り入れる必要がある。

例えば学習者にAnalyzingのレベルの思考に従事させたいのであれば、日本人がなぜ英語が苦手なのかその原因を分析させて意見交換させるという活動が考えられる (渡部他, 2011, p. 26)。Creatingのレベルの思考に従事させたいのであれば、子どもの貧困を解決するための案をプレゼンさせるという活動が考えられる。

上記のような活動を行うためには、英語の語彙をたくさん知っている、文法知識をたくさん持っているというだけでは不十分である。学んだ内容を既存の知識や経験と結びつける、あるいは批判的に考察を行うことが求められる。これを英語の授業に取り入れるのは無理だという主張もあるであろう。しかし、2010年8月17日に日本学術会議が文部科学省高等教育局に対し

て回答した「大学教育における分野別質保証の在り方について」には、以下のように記されている。

国際共通語としての英語の教育は、従来の外国語教育とは別のカテゴリーに属するものと解するべきである。グローバルな局面で、文化と言語を異にする他者と協同し交流する能力を育成するために、アカデミック・リーディング、アカデミック・ライティング、プレゼンテーションを核とする「英語によるリテラシー教育」を構想する必要がある。

大学の英語教育に求められているのは、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) のレベルではなく、CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) レベルの英語力⁴であることが分かる。これを育むためには、認知負荷 (Cognitive Demand) の高い活動に従事する機会が必要である。

英語を教える際にまず注目されるのは言語負荷 (Linguistic Demand) であるが、大学の英語の授業においては認知負荷 (Cognitive Demand) も考慮に入れた上で授業内容を検討することが求められている。

英語を専攻としない学生にアカデミック・ライティングの指導は無理であるという主張もあるかもしれないが、英語を専攻としない大学1年次生であっても、内容に深みのあるエッセイを書かせる指導は可能である (Iwanaka, 2015)。

筆者のこれまでの経験では、大学入学時点で英検2級以上の英語力を持っている学習者は、授業を英語で行うことに対しては肯定的な反応を示すことが多いが、同時に認知負荷 (Cognitive Demand) の高い学習活動を求める傾向がある。授業を英語で行いながら、定期的にプレゼンテーションやライティングなどの活動を取り入れるという授業に対して、彼等が高い満足度を示すことが確認できている。

Ⅲ. 結語

高等学校で新しい学習指導要領が施行されて今年で3年目である。平成28年度からはいよいよ新学習指導要領で英語を学んだ学生が大学に入学してくる。

旧学習指導要領で英語を学んだ学習者と新学習指導要領で英語を学んだ学習者の中でMOIに対する好み

や期待がどのように異なっているのかについては、稿を改めて報告する。

謝辞

本研究はJSPS科研費26284080の助成を受けたものです。

本研究を実施するにあたり、調査に協力してくださった学生に対して心より御礼を申し上げます。

参考文献

- Anderson, L., Krathwohl, D., Airasian, P., Cruikshank, K., Mayer, R., Pintrich, P., Raths, J., & Witlock, M. (2001) *A taxonomy for learning, teaching, and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives*. London, UK: Longman.
- Carson, E. (2015) Introducing a new scale: Student preferences for instructional language (SPIL). *JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin*, 12, 19-36.
- Cummins, J. (2008) BICS and CALP: Empirical and theoretical status of the distinction. In B. Street, & N. Hornberger (Eds.), *Encyclopedia of language and education, 2nd edition, volume 2: Literacy* (pp. 71-83). New York, NY: Springer Science + Business Media LLC.
- Iwanaka, T. (2015) *Automated computer-based feedback and tailor-made feedback by teachers: Their contribution to learners' writing proficiency*. Paper presented at the JACET 54th International Convention, Kagoshima, Japan.
- Krashen, S. (1982) *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford, UK: Pergamon.
- Long, M. (1990) Maturational constraints on language development. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 251-285.
- Macaro, E. (2011) *The teacher's code switching and the learner's strategic response: Towards a research agenda and implications for teacher education*. Paper presented at the JACET 50th Commemorative International Convention, Fukuoka, Japan.
- Swain, M. (2000) French immersion research in Canada: Recent contributions to SLA and applied linguistics. *Annual Review of Applied Linguistics*, 20, 199-212.

4 BICSとCALPの詳細についてはCummins (2008)を参照。

- 岩中貴裕 (2011) 「学習意欲の向上に貢献する教室活動－考慮すべき3つの心理的欲求－」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』第8号, 1-16.
- 岩中貴裕 (2014) 「協同学習を取り入れた内容重視の授業－そのリメディアル教育としての可能性－」『四国英語教育学会紀要』第34号, 47-56.
- 岩中貴裕, ウィリー イアン, 岩井千秋, 高垣俊之, 小西廣司, カワモト ジュリア, カーソン エレノア (2015) 「日本人大学生の教授言語に対する好みと期待－外国語としての英語の授業におけるL1使用に対する態度－」『香川大学教育研究』第12号, 117-128.
- 卯城祐司 (編著) (2014) 『英語で教える英文法』東京: 研究社.
- 西川純 (2015) 『アクティブ・ラーニング入門』東京: 明治図書.
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京: 大修館書店.
- 渡部良典, 池田真, 和泉伸一 (2011) 『CLIL 内容言語統合型学習 第1巻 原理と方法』東京: 上智大学出版.